メダンのロマン・ピチサン

——一九三〇年代末インドネシア文化地図と大衆小説をめぐる政治——

山本信人

はじめに
一　都市メダン
二　メダンの定期刊行物
三　ロマン・ピチサンの拡散
四　文化地図の変動
おわりに

はじめに

一九三〇年代末、スマトラ島のメダン、パダン、フォルト・デ・コックを中心として、「ロマン・ピチサン」(roman pitjican)と呼ばれる一群の大衆小説が流行した。[1] それはたんなる流行にとどまらず、当時のメダンには「小説があふれており」(bandjir roman)[2]、ロマン・ピチサン運動とでもいえる現象が展開されていた。ピチサンとは一〇セント

硬貨のことであるから、ロマン・ピチサンとは「三文小説」という意味になる。発祥地メダンの名をとって「ロマン・メダン」とも称された。ロマン・ピチサンはいずれも大衆文芸誌に掲載、あるいはそのシリーズの一環として出版された。すべて一九三〇年代に商業出版の世界に進出した「原住民」の民間出版社により発行されている[押川 1986: 130]。

ロマン・ピチサンの特徴は、当時の東インドにおける「中央」との比較でより鮮明になる。すなわち、空間的な「中央」であったジャワではなくスマトラ、とくにメダンを機軸に発達した点、出版は「中央」である植民地政庁のバライ・プスタカ(Balai Poestaka)ではなく民間の出版社の手による点、そして「中央」が創りあげた「正統的な」文学史では軽視されてきた大衆小説である点である。[3] なぜメダンがロマン・ピチサンの起点となったのか、なぜ一九三〇年代末に流行したのか、誰が生産の担い手となっていたのか、どのような範囲で消費されていたのか。ロマン・ピチサンの隆盛はいかなる東インドにおける文化地図のもとでおこったのか。こうした疑問を解くために、本稿の目的は、一九三〇年代末のロマン・ピチサンの隆盛を、インドネシア・ナショナリズムの一端として捉え、その政治的インプリケーションを探ることにある。

各種出版物、とりわけ定期刊行物がインドネシア民族意識の生成、インドネシア民族運動の展開において主要な要素をしめていたことは周知の事実となっている。なかでも、新聞はニュース性の高い記事を主体として構成され、時代の変化を反映する鏡であった。[4] 監視する東インド政庁からすれば、新聞をモニターしておけば原住民社会で何が起っているかを把握することも可能である。それゆえに、「政治性」の高い出版物とみなされ、センサーシップの対象になりやすい。一方、従来の研究ではインドネシア・ナショナリズムにおける、もうひとつの定期刊行物である雑誌のはたした役割は軽視されてきた。[5] 雑誌はかならずしもニュースが主体ではなく、むしろ評論から教育、文芸、宗教などに関しての意見を表明する場となっている。センサーシップとの関連では、報道の色彩に乏しい雑誌が発行停止対象となることは希有なケースであった。東インド政庁の求めた公共の「秩序と安寧」が新聞以外の定期刊行物によっ

て乱されるとは考えられていなかったからである。

しかしながら、オランダ植民地下の定期刊行物を取り扱う場合、今日的な意味で新聞と雑誌の区別をつけることに疑問を呈しない訳にはゆかない。原住民ジャーナリストは同時に作家でもあり、新聞、雑誌双方に深く関与し、インドネシア・ナショナリズムを主導していた。そもそもインドネシア語（マレー語）での、soerat kabar（新聞）、madjallah（雑誌）の定義は曖昧である。オランダ期においては日刊紙だけがsoerat kabarではなく、週刊soerat kabarは多数存在したし、逆に週二回発行のmadjallahは珍しいことではなかった。たとえ日刊紙であっても、発刊後数日ないし数週間たっても、眼や耳で「読まれる」ことは日常茶飯事であった。読者層にしても、新聞と雑誌の読者を分別することは不可能に近いし、区別をつける意味はあまりない。また、オランダの監視・取締対象として新聞は主たるターゲットではあったが、定期刊行物としての雑誌を無視してはいなかった。たとえば、一般に新聞統制令(Persbreidel-ordinnantie)と呼ばれている一九二一年の総督令第三九四号の正式名称は、「望ましからぬ定期刊行物事業から公共の秩序と安寧を守る総督令」であった。(6) バライ・プスタカが一九二三年に発行を開始した週刊誌『パンジ・プスタカ』(*Pandji Poestaka*)は、「危険な」マレー語新聞を市場からしめだすことを主要目的のひとつとしていた。こうしてみると、東インド政庁の使用する新聞(pers)という語には定期刊行物という意味があり、雑誌も含めて考えるべきことが明確になる。

植民地末期の出版物をめぐり興味深い点は、定期刊行物の隆盛であり、なかでもいわゆる雑誌が新聞の発行数をはるかに上回っている事実である。たとえば、あえて新聞と雑誌を区別して統計をとると、一九二五年以降、東インドにおいて発行された雑誌の数は八四五なのに対し、新聞は五六七紙であった。(7) 出版物と政治との関係は、東インド政庁が警戒し監視する主たる対象としていた新聞とインドネシア民族主義者とのあいだにだけ形成されるとはかぎらない。雑誌の形態をとった定期刊行物が非政治的であるとは断定できない。大量かつ多種多様な雑誌をはじめとする定

期刊行物をとおして作者、発行者、読者の関係性が築きあげられていた。当局の関心外にあった新聞以外の定期刊行物の制度的基盤を検討することによって、植民地権力者の想定する政治とは別の形態の「政治」をみることが可能となる。

定期刊行物の一環として発行されたロマン・ピチサンの政治的意味合いを探るために、本稿では、まずメダンの社会経済的背景を概説する。つぎに、スマトラ東海岸の政治的展開とメダンの定期刊行物の特徴を描写し、ロマン・ピチサンとはいかなる形態をとり、どのように分布していたのかを記す。最後にロマン・ピチサンの隆盛と東インドの文化地図の変動、そしてそこにみられる「政治」のあり方を明らかにしたい。しかし、本稿では、ロマン・ピチサンの詳細な内容紹介とその分析は試みない(8)。その替わりに、ロマン・ピチサンをめぐり展開されていた「政治」を浮かび上がらせることに本稿の主眼はある。

一　都市メダン

メダンが近代都市としての様相を整えるのは一九一〇年代からであった。メダンは当初から綿密な都市計画にしたがって発展したがゆえに、東インドの他のいかなる都市よりも繊細である、と描写されるほどであった[Encyclopaedie 1921: 691]。

メダンの開発は一八七〇年代以降のことであった。メダンの位置するスマトラ東海岸は一八七〇年代以降、デリ周辺を中心として、錫、ゴム、石油などの天然資源とタバコ・プランテーションの開発により、急速に発展したからである。プランテーション経営の発展はスマトラ東海岸の社会経済的成長のみならずおおきな社会変動をもたらした。とくに人口増加と人口構成には急激な変化がみられる。スマトラ東海岸における人口は、一八八〇年には一二万人に

満たなかったが、一九〇五年には五〇万人を突破し、一九三〇年には一七〇万人近くにまで増加した。じつに一九二〇年から三〇年の一〇年間で、メダンの人口は六九%も増加している[Van Langenberg 1977: 110]。

スマトラ東海岸の人口構成の特徴は、ヨーロッパ人はプランテーション経営とそれを維持する社会的インフラストラクチャー整備のために、また華人とジャワ人はもっぱらプランテーション労働者（苦力）として当地に到来した点にある。一九三〇年の統計にしたがって人口構成をみてみると、スマトラ東海岸には一万一千人ほどヨーロッパ人がいたが、そのうちの三分の一以上をしめる四二一八人がメダンに居住していた。スマトラ東海岸における華人人口は一九万二八二二人で、うち二万七千人が工場労働者であった。また、都市別の総人口にしめる華人人口比は、メダンが三六%、プマタン・シアンタールが三二%、タンジュン・バライが四六%、トゥビン・ティンギが七五%となっている(9)。

プランテーション経営が成功するにつれ、東インド政庁のスマトラ東海岸に対する関心も必然的に高まった。メダンはタバコ・プランテーション、パレンバンとジャンビは石油ならびにゴム生産、プカンバルは流通ルートの中枢として発展を遂げていた。一九〇九年にはメダンに東スマトラ州都が設置された[Encyclopaedie 1921: 691-692]。一九三〇年代には、バタヴィアーパレンバンープカンバルーメダンを結ぶオランダ王立航空定期便が就航した。スマトラでの中心は、一九二〇年代までのパダン、ブンクル、タパヌリといった西海岸から、三〇年代には東海岸へと移行したのである。金融、商業、輸出業、港湾設備の充実だけではなく、一九三五年には、全スマトラの行政の中心として、それまでのパダンの替わりにメダンが選ばれた[Colombijn 1994: 89-91]。こうして三〇年代のメダンは、バタヴィア、スラバヤ、スマランとならんで東インドの四大都市のひとつと数えられるまでになり、スラバヤとともに東インドの商業の中心となった。

東スマトラはプランテーションが社会経済の基盤であった。それは急速な経済発展をもたらしたという意味では利

点であったが、他方世界の市場動向、土地使用状況、域外からの大量の人の流れに左右されるという弱点も持ち合わせていた。一九二〇年代の熱帯産品の輸出ブーム、とりわけ世界市場におけるゴムの需要増大がメダンの発展におおきく寄与したことには間違いない。しかし、世界大恐慌の影響もあり三〇年代スマトラ東海岸をとりまく環境に変化が訪れた。輸出ブームは去り、熱帯産品の価格を引き下げねばならなくなった。それを可能にする方法は労働コストの引き下げであり、結果として経営者とプランテーション労働者との関係が不安定化した。また、三〇年代になると、以前のように一攫千金を狙ったオランダ人だけではなく、政治的意識の高いミナンカバウ人、バタック人たちがメダンへと移動をはじめた。かれらは政治団体のみならず各種社会、教育、文化、宗教団体を設立して、活発な活動を開始した。こうしてスマトラ東海岸の政治、社会経済構造は新しい局面をむかえるようになった[O'Malley 1977: 104-143]。

二　メダンの定期刊行物

一九世紀末以降一九二〇年代にかけてスマトラでの出版業の発祥地であり中心は、スマトラの行政、経済の中心都市である西海岸のパダンであった[Adam 1995: 125-158]。ミナンカバウ人は出版および書籍販売の四割を支配していた、といわれる[Kimman 1981: 95, f. n. 40]。パダン、フォルト・デ・コックを中心に、二〇世紀初頭から、プワルタ(Pewarta)、ティモール(Timoer)、アガム(Agam)、リンバゴ・ミナンカバウ(Limbago Minangkabau)といった民間の出版業者が、定期刊行物、学校教科書、イスラーム関連書籍を発行していた(10)。これに対して、メダンは一九世紀後半まで英領海峡植民地へ依存度が高かった。東インドの行政の中心であるバタヴィアがスマトラ東海岸の事情を当地のオランダ人から直接入手できるようになったのは、一八八五年三月一八日発刊のオランダ語紙『デリ・クーラント』(*Deli Courant*)以降であった[M. Said 1976b: 4-5]。

メダンで原住民の手によるマレー語新聞が発行されるようになったのは、一九一〇年の『プワルタ・デリ』(*Pewarta Deli*)以降である。[**表1**]にはメダン発行新聞と発行元、編集主幹をまとめてある。一九一〇年以降多数の新聞が刊行されているが、政治性の希薄な、商業、経済関係の記事を主体とする紙面構成が主流であった。たとえば、一九一〇年代には、『プワルタ・デリ』と華人系『アンダラス』(*Andalas*)の二紙の競合状況が存在した。それぞれ広告中心に紙面が構成されていたこともあり、たがいのエスニックな政治には関わらないようにしていた[Adam 1995: 150–151]。

メダンに政治的主張を掲載する新聞が登場したのは、イワ・クスマ・スマントリ(Iwa Koesoema Soemanteri)が主幹した『マタハリ・インドネシア』(*Matahari Indonesia*)が発行された一九二八年であった。これはスマトラ東海岸における民族主義的政治の開始と軌を一にしていた。一九三〇年代のメダンでは、アディ・ヌゴロ(Adi Negoro)率いる『プワルタ・デリ』、マンガラジャ・フタン(Mangaradja Ihoetan)の『シナール・デリ』(*Sinar Deli*)、華人マレー語紙『プリタ・アンダラス』が主要マレー語紙であった。前二紙はいずれも政党機関紙ではなかったが、民族主義的であり、他方『プリタ・アンダラス』は華人コミュニティを代弁していた。しかし、いずれも新聞統制令の適用対象になるほど当局によって政治的に危険視されていたわけではなかった[11]。これは、当局による厳しい言論統制とエリート中心の世俗主義的政治と烙印された一九三〇年代の民族主義的政治のあり方を反映している[McVey 1965: 354]。

一九一〇、二〇年代のインドネシア・ナショナリズムはジャワ、西スマトラでは都市エリートだけではなく、農民、労働者をも含んだ、動員型のラディカルな運動であった。しかし、一九二六、二七年に西ジャワ、西スマトラで勃発した共産党反乱とその沈静化以降、大量の共産党員が逮捕、流刑に処された。この結果、民族主義的運動は人民との連携を断たれ、替わってスカルノ(Soekarno)らの都市エリートが民族主義運動を主導するようになる[12]。ジャワや西スマトラとは異なり、スマトラ東海岸における民族主義的政治は一九三〇年代になって本格的に開始された。ラディカリズムの芽はスマントリによってスマトラ東海岸に移植された。つまり、ジャワと較べて一世代遅く民族主義運動

[表1] メダンの新聞

	新聞名(閉刊年)	発行元(編集長、発行頻度)
1910	Pewarta Deli (-1942)	Sjarikat Tapanoeli (Dja Endar Moeda, Soetan Parlindoengan, Mangaradja Ihoetan, Kanoen, Adi Negoro) (harian)
1912	Andalas (-1924)	Sumatrasche Handelsdr (T. B. Choo) (3xseminggu) (continued as Pelita Andalas)
1915	Soeara-Regie (-1929)	Opium-Regie Bond Loear Djawa Madoera (bulanan)
1916	Soeara Djawa (-1918)	Cooperatie Vereeniging Eko Prodjo (Sastropawiro) (2xsebulan)
1916	Benih Merdeka	Handel Mij Setia Bangsa (Mohd. Samin, Mohd. Joenoes, R. Mangoen Atmodjo) (harian)
1918	Soeara Bondjol (-1924)	Vereeniging Setia Bondjol (A. Marzoeki) (bulanan)
1921	Persatoean Hati	Persatoean Hati dari Personel Handels Bond (mingguan)
1921	Sinar Zaman (-1922)	Sinar Zaman (Mohamad Joenoes) (2xseminggu)
1922	Pantjaran Berita (-1925)	Mij Batak (Soetan Parlindoengan) (3xseminggu)
1923	Warta Timoer	Handel Mij Setia Bangsa (Abdul Malik) (harian)
1924	Pelita Andalas (-1942)	Sumatrasche Handles Drukkerij (Tengkoe Hasjim, Kasoema) (3xseminggu)
1924	Tijn Po (-1929)	Tijn Po (Kwee Keng Liong, Tan Tek Bie) (harian)
1925	Kompas (-1926)	Inlandsch Personeel Deli Spoorweg Vereeniging (Dutch, bulanan)
1925	Oetoesan Soematra (-1932)	Handel Mij Batak (Djaparlagoetan, Djauhari Salim, Kanoen) (harian)
1928	Mataharı Indonesia	Mij "Indonesia Raya" (Iwa Koesoema Soemanteri, J. Manoppo, Mohd. Joenoes) (harian)
1928	Sinondang Baroe (-1930)	Sinondang Baroe (mingguan)
1930	Sinar Deli (-1942)	Mij Sinar Deli (Mangaradja Ihoetan) (harian)
1932	Poesaka Karo	Poesaka Kara (Karo) (3xseminggu)
1933	Medan Ra'jat	s. n.
1934	Moetiara (-1936)	Boekhandel "Moetiara" (mingguan)
1935	Parbarita	"Kongsi Parbarita" (Batak) (mingguan)
1939	Siandjoer (-1940)	Indische Drukkerij (2xsebulan)

[出所:(M. Said 1976a, 1976b)より、筆者作成]

註記:この表には、華人発行紙はひとつ(『タイン・ポ』[Tıjn Po])しか含まれていない。1920、30年代のメダンでは、『スマトラ・ピン・ポ』、『ニュー・チャイナ』など複数の華人マレー語紙、華語紙が発行されていた。しかし、残念ながらインドネシア国立図書館にすら、それらの現物、関連資料はほとんど保存されていない。

が展開されるようになったのである。

スマトラ東海岸での運動の特徴は、プランテーションと移民によって開拓された事情を反映して、その政治の主体が東スマトラ出身者ではなかった点にある。ジャウハリ・サリム(Djauhari Salim)、アブドゥル・ハミド・ルビス(Abdul Hamid Lubis)、スータン・ヌール・アラムシャ(Sutan Nur Alamsjah)、モハマド・ジョニ(Mohamad Djoni)といった主要な民族主義者も、それぞれ西スマトラ、北スマトラなどからメダンへ活動の拠点を求めてやってきた。プランテーションに依存した経済ゆえに大恐慌の影響は多大であったが、それが政党政治の展開と直結することはなかった。プランテーション経営から派生して強力な警察監視能力が存在し、原住民の民族構成も多様であり、プランテーション労働者は当局によって巧妙に政治家とは隔離されていたからである。しかし、一九三七年にグリンドの東スマトラ支部を統括するモハマド・ジョニがカロの農民との接触に成功してからは、局面が一転する。人民と対話し、人民を動員した民族主義的な、急進的な政治が展開されることとなった[O'Malley 1977: 256-285]。

スマトラ東海岸において急進的な政治が展開されているころ、メダンではそれを直接には反映しない多種多様な雑誌が急速に成長を遂げていた。メダンで発行された雑誌を一覧表にまとめたのが【表2】である。ここでの特徴は、第一に、一九三〇年代におけるイスラーム色のつよい雑誌数の増加である。三〇年代に発行された雑誌一九誌のうち七つがイスラーム誌である。なかでもハムカ(Hamka, Hadji Abdoel Malik Karim Amroellah)が編集責任を担ったりかかわった雑誌は、『スル・イスラーム』、『パンジ・イスラーム』、『プドマン・マシャラカット』、『プドマン・イスラーム』の四誌にのぼる。

ハムカは、ミナンカバウ出身で、当時メダンを拠点とする東スマトラにおける改革派イスラーム団体ムハマディア(Moehammadijah)の指導的立場にあった。ムハマディアは、一九一二年にジャワのジョクジャカルタで設立された。その活動の主眼は、政治運動にはなく、イスラームの改革運動と学校、病院の設立などの社会運動にあった。二〇年

［表2］ メダンの雑誌

	雑誌名（閉刊年）	出版社（編集長、出版頻度）
1919	Sama Rata = Recht Boven Macht (-1920)	Commisie Djawa (Mangoen Atmodjo, Boedi Mandjono)
1920	Delı Proestation te Medan	s. n.
1920	Pelita-Hoekoem	Medansche (Mohd. Samin & Abdullah Loebis) (2xsebulan)
1922	Al-Ichwah	Setıa Persaoedaraan (H. M. Noer Ismail) (bulanan)
1924	Boemipoetera	Kohler (Mohd. Idham, M. R. Soertı) (3xsebulan)
1925	The Deli Weekly Review	De Soematra (J. Koning) (bhs Belanda, mingguan)
1925	Oetoesan Goeroe	s. n. (Zahari, Djaparlagoetan, Djauhari Salim) (bulanan)
1927	Pertja-Timoer	Kongsı Indonesia (D. I. Loebıs) (mingguan)
1927	Deliana	Zahari (Zahari)
1928	Sinondang Baroe	Batak (mingguan)
1930	Sedar	s. n. (Boedi Oetomo) (bulanan) (continued as "Kemaoean")
1930	Kemaoean	s. n. (Redaksi komisi) (bulanan)
1931	Abad keXX (-1932)	Sjarikat Tapanoeli (Adi Negoro)
1932	Abad XX (-1942)	Sjarikat Tapanoeli (Adi Negoro, Nip Zarim, Adaham Hasiboean) (mingguan)
1933	Dewan Islam	Badan Penerbit Dewan-Islam (M. Arsjad Th. Loebıs) (bulanan)
1934	Soeloeh Islam (-1941)	Komite Kesadaran Islam (Hamka) (3xseminggu)

代後半になると、ムハマディアは西スマトラで急速にその勢力を拡大した。その非政治性ゆえに、二七年の共産党反乱後、元共産党員や急進的なイスラーム教徒らが大挙してムハマディアに活動拠点を求めたからである。急進的イスラーム団体プルミ（Permi）の拠点があったミナンカバウ地域、パレンバン、ブンクルでは、その傾向が顕著であった。こうしてムハマディアはスマトラにおけるイスラーム運動の中心となった[13]。三〇年代にスマトラ全体でイスラーム雑誌が多数発行されたのも、ムハマディア運動の拡大の結果であったと思われる。

第二の特徴は、三〇年代末における大衆文芸誌の流行である[14]。これはメダンに限定されることなく、パダン、フォルト・デ・コックというミナンカバウ地域でも同様な傾向がみられる。この大衆文芸誌

	雑誌名（閉刊年）	出版社（編集長、出版頻度）
1934	Pandji Islam（-1941）	Poestaka Islam（Hamka, Zainal Abidin Ahmad）（3xsebulan）
1935	Pedoman Masjarakat（-1941）	Mij Soematra（Hamka）（mingguan）
1936	Tjahaja Islam	s. n.
1937	Keoetamaan Isteri	Keoetamaan Isteri（Ny. Mohd. Joesoef, M. Haznam, Leepel）（bulanan）
1937	Tafsir Alquranoelkarim	Islamijah
1938	Sinar	Badan Oesaha（Saleh Dja'far）
1938	Doenia Pengalaman（-1941）	Poestaka Islam（A. M. Pamoentjak, A. Damhoeri）
1938	Penjedar	Publiciteits Bureau
1939	Pedoman Islam（-1941）	Badan As Sjoera（Hamka）
1939	Doenia Kakak-kakak（-1940）	Ivoorno（Mohd.Noeh, Perkoempoelan Goeroe-goeroe）
1939	Soematra Timoer	Kabler
1939	Penoentoen	Penoentoen
1939	Seroean Kita（-1940）	Persekoetoean Seroean Kita（Mohd. Said & Ani Idrus）（mingguan）
1939	Loekisan Poedjangga（-1942）	Tjerdas
1939	Taman Siswa	Taman Siswa
1939	Loekisan Doenia（-1940）	N. V. Kohler & Co.（Libero, Moelhtar Nasoetion）（mingguan）
1940	Seri Moestika Alhambra	Alhambra
1940	Moestika Alhambra	Alhambra
1940	Poernama	Poestaka Islam（M. S. Oemar）（bulanan）

［出所：（Santoso 1984; Said 1976a; 1976b）より、筆者作成］

の中心であったのが、次節で議論するロマン・ピチサンである。

両者ともに商業出版として成功をおさめており、それゆえにそれを支える読者層の存在していたことが伺える。このような雑誌の流行がその非政治的内容に起因するとは断定できない。イスラームを語りながら政治性をふくむことは容易であるし、探偵小説を主流としたロマン・ピチサンにも独自の「政治」が描写されていた［押川 1986］。次節以下では、一九三〇年代末の現実政治の閉塞状況のなかで、こうした雑誌が発行されたことの政治的意味をロマン・ピチサンをとおして解き明かしてみたい。

三　ロマン・ピチサンの拡散

ロマン・ピチサンの大半は、大衆文芸誌に掲載されるという形態をとった。[15] 一九三〇年代末には、『経験の世界』(*Doenia Pengalaman*, 1938-41)、『詩人のスケッチ』(*Loekisan Poedjangga*, 1939-42)、『極楽鳥』(*Tjendrawasih*, 1940-42)、『運動の世界』(*Doenia Pergerakan*, 1940-?)、『インドネシアのロマン』(*Roman Indonesia*, 1934-40)、『社会ロマン』(*Roman Pergaoelan*, 1939-41)などの類似の大衆文芸誌が刊行されている。こうしたロマン・ピチサンは四年から五年のうちに約四百冊が出版された[Jacob 1982: 14][16]。共通点は、第一に、月に一、二回発行され、七〇頁から八〇頁の小説をひとつ、もしくは一、二の短編小説を掲載している。第二に、内容的には探偵、スパイ、政治・歴史、恋愛小説であった。第三に、それぞれのロマン・ピチサン系大衆文芸誌は一〇人から二五人の、非常に生産力の高い作家を抱えていた。第四に、しかもそのほとんどが一九三七年から四一年のあいだに出版された。第五に、空間的には、東スマトラのメダン、西スマトラのパダン、フォルト・デ・コック、中部ジャワのスラカルタ、北セレベスのゴロンタロにおいて生産された。第六に、出版社は三〇年代にはいり商業出版分野に進出したが、スマトラに月刊読み切り小説という形式が定着したのは三〇年代末にすぎない。

ここでは、ロマン・ピチサンの代表例としてメダンで一九三八年から発行された『経験の世界』を紹介したい。[17] この雑誌には「大衆探偵小説誌」(Madjallah Roman-Detective Popoeler)との副題がついている。編集長はパムンチャック(A. M. Pamoentjak)、のちにダムフリ(A. Damhoeri)、[18] 編集員としてユスフ・ソユブ(Joesoef Sou'yb)、ジャレンス(Djarens)、マトゥ・モナ(Matu Mona)、ムフタル・ナスティオン(Muchtar Nasution)がいた。挿絵はユスフ・フシン(Joesoef Hoesin)が担当し、出版社はメダンのプスタカ・イスラーム(Poestaka Islam)、印刷はシャリカット・タパヌリ(Sjarikat Tapanoeli)が請負っていた。この他にも、マンダンク(Or. Mandank)、ハムカ、スマン(Soeman

Hs)、スラシ(Selasih)などの著名作家が寄稿している。[表3]からわかるように、『経験の世界』の場合、雑誌編集委員の作品が目立ち、ユスフ・ソユブが一二作で圧倒的に多作であり、ついでダムフリが七作、ジャレンスの七作となっている。ユスフ・ソユブはほぼ一ヵ月に一冊のペースで大衆小説を量産していた計算になる。これらの作家は、それぞれ他のロマン・ピチサン系大衆文芸誌にもたがいに作品を執筆しあっている。(19)

『経験の世界』の出版頻度は、一九三八年が月に一回、三九年前半は月二回、同年七月から四一年末にかけては月三回であった。出版部数は各号三千部で、通常数ヵ月のうちに完売していた。(20)購読料は月二五セント(三八年から三九年六月まで)、三九年七月以降は月五〇セントに値上げされている。ここで比較のために当時の日刊紙購読料をあげておくと、平均して七五セントから一ギルダーであった。つまり、日刊紙を定期購読しているような都市部中流階層の読者にはそれほど高価なものではなかった。また、インドネシア近代文学を代表する小説であるアブドゥル・ムイス(Abdoel Moeis)『西洋かぶれ』の三冊本[Abdoel 1928]、一冊あたりの値段は四五セントであった。バライ・プスタカは安価な読み物を大量に生産し、書籍市場を寡占していたことを考えると、ロマン・ピチサンの安さ、手ごろさがわかる。

出版元であるプスタカ・イスラームはムハマディアと密接な関係をもっていた。『経験の世界』を出版していただけではなく、一九三四年から週間誌『パンジ・イスラーム』(*Pandji Islam*)(編集長ハムカ、のちザイナル・アビディン・アハマド[Zainal Abidin Ahmad])、四〇年一月からは月刊誌『満月』(*Poernama*)(編集長ウマル[M. S. Oemar])といったムハマディア機関誌を発行していた。一九四〇、四一年の『パンジ・イスラーム』には頻繁に、三八年にムハマディアに入会した、スカルノの執筆したイスラーム関係記事が掲載されている。(21)また、それぞれの雑誌の広告から判断して、その他多数のイスラーム関係書(チョクロアミノト著のイスラーム史の書籍[*Tarich Agama Islam*]、ハムカのイスラーム関連書物)、政治関連書籍(スカルノ『インドネシア告発』[*Indonesia Menggugat*]、ストモの伝記[*Riwajat Peng-*

［表３］『経験の世界』（Ⅰ-1 [Oct. 38] － Ⅲ-15 [May 40])

A. Damhoeri, 'Azimat Toea Dari Abad 17 (Topeng Hitam), I-1 (Oct. 38)
Joesoef Sou'yb, Ratjoen Nicotine atau Pembalasan Dendam Chasoemat, I-1
Joesoef Sou'yb, Elang Emas Ketawa, I-2 (Nov. 38)
A. Damhoeri, Depok, Anak Pagai (Lamoenan Ombak di Pantai Poelau2 Mentawai), I-2
Joesoef Sou'yb, Pengepoengan Kota Bondjol, I-3 (Dec. 38)
Jahjaniah, Boeaja Deli Diserkap Matjan Singapore, I-3
S. Djarens, Terlambat, I-3
A. Damhoeri, Hantoe Laoet di Selat Malaka, Ⅱ-1 (15-1-39)
S. Djarens, Dokter Pentjoeri Majat (Kegelisahan Dr. Zin), Ⅱ-2 (30-1-39)
A. Damhoeri, Majapada, Ⅱ-3 (15-2-39)
Joesoef Sou'yb, Keringkasan Riwajat Hidoepkoe, Ⅱ-3
@ Aria Diningrat, Rahsia Kaloeng Moetiara, Ⅱ-4
@ Si Oema, Pemboenoeh Dr. Wolf Gloucer, Ⅱ-5
@ Sahiboel Hikajat, Membalaskan Dendam, Ⅱ-6
@ A. Damhoeri, Pahlawan Padang Pasir, Ⅱ-7
@ Soeman Hs, Teboesan Darah, Ⅱ-8
@ Musra Sjahboeddin, Maga Borala, Ⅱ-8
@ S. Djarens, Sidjoendai, Ⅱ-9
@ A. Damhoeri, Hoeloebalang Teukoe Oemar, Ⅱ-10
Joesoef Sou'yb, Memikat Elang Emas, Ⅱ-11 (14-6-39)
Inangda, Timboenan Majat di Abad ke 17, Ⅱ-12 (24-6-39)
Musra Sjahboeddin Raihulamar, Naga Borala (Gadis Disarang Penjamoen), Ⅱ-12
Joesoef Sou'yb, Perdjoeangan di Bandar Malaka, Ⅱ-13 (5-7-39)
Joesoef Sou'yb, Pengorbanan di Medan Perang (Oentoek memperingati Perang Tiongkok-Djepang), Ⅱ-14 (15-7-39)
A. Damhoeri, Pertanda, Ⅱ-15 (5-8-39)
Joesoef Sou'yb, Elang Emas, Ⅱ-16 (15-8-39)

hidoepan Dr. Soetomo dan Perdjoeangannja]）なども出版している。さらに、プスタカ・イスラームは独自の図書室「生きる！」（Hidoep!）も経営していた。そこでは月会費六五セントを支払えば、月に二八冊まで借りられる、という特典がついてきた。

つぎに、「プロパガンディスト」と呼ばれていた『経験の世界』のエイジェントの分布に眼を転じてみよう。エイジェントは、スマトラではパダン・シドクゥンプアン、ビンジャイ（タパヌリ）、タヤクンブ、サワ・ルント、パダン、フォルト・デ・コック、ソロッ（西スマトラ）、コタ・ラジャ、ランサ（アチェ）に拡がっていた。スマトラ以外の地域としては、スラバヤ、ジョクジャカルタ、スラ

Mhd. Hassan Tansa, Hantoe Koeboer ...!, Ⅱ-17 (5-9-39)
@Ⅱ-18
Joesoef Sou'yb, Elang Emas di Pagar Roejoeng, Ⅱ-19 (5-10-39)
Joesoef Sou'yb, Rahsia Pengoekir Patoeng, Ⅱ-20 (15-10-39)
S. Djarens, Dr. Zin, Manoesia Kedjam, Ⅱ-21 (25-10-39)
Joesoef Sou'yb, Spionnage dalam Perang Doenia Kedoea, Ⅱ-22 (5-11-39)
Joesoef Sou'yb, Siapa Pemboenoehnja??, Ⅱ-23 (15-11-39)
S. Djarens, Taboet, Ⅱ-24 (25-11-39)
Emnast, Pembalasan, Ⅱ-25 (5-12-39)
Matu Mona, Detectief Rindu (Djntjin berlian dari Golconda), Ⅱ-26 (15-12-39)
Surapati, Tanda Tangan Palsoe, Ⅱ-27 (25-12-39)
S. Djarens, Elba, Ⅲ-1 (5-1-40)
Si Oema, Dr. Effendy (Pengaroeh Hypnotisme), Ⅲ-2 (15-1-40)
@Ⅲ-3
@Ⅲ-4
Si Oema, Darah Perwira, Ⅲ-5 (15-2-40)
@S. Djarens, Mr. Chan, Ⅲ-6 (25-2-40)
@Surapati, Letoesan Bom di Solo, Ⅲ-7 (5-3-40)
Katja Mata, Palang Merah, Ⅲ-8 (15-3-40)
Emnast, Taw Malaka di Medan, Ⅲ-9 (25-3-40)
@Synoe and Thomas, Toekang Keboen Rahasia, Ⅲ-10 (5-4-40)
Si Oema, Pemboenoeh Jang Ta' Bersalah, Ⅲ-11 (15-4-40)
@Ⅲ-12
S. Oesmany, Dr. Chung, Ⅲ-13 (5-5-40)
A. Samad dan N. Soetan, Meninggalkan Palang Salib, Ⅲ-14 (15-5-40)
S. Oesmany, Mr. Bacht, Ⅲ-15 (25-5-40)

(@印はインドネシア国立図書館で紛失している号)

カルタ、チルボン(ジャワ)、サマリンダ(東カリマンタン)、バンジャールマシン、アムンタイ、カンダンガン、マルタプラ(南カリマンタン)などであった。このように読者はメダンに限定されるのではなく、西スマトラ、中東部ジャワ、南カリマンタンに拡がっていた。興味深いのは、エイジェントの拡がりが、ムハマディア運動の展開している地域とほぼ重なる点である[22]。

ロマン・ピチサンの拡散状況を把握するさい、もう一点注目すべきは、メダンが発信地となりスマトラ、ジャワ、カリマンタンへと拡がっていた事実である。これは当時の通常の情報・文化の流通形態と相反する。情報は、行政の中心であったバタヴィアから各地へと流れていたからで

ある。[23] ロマン・ピチサンの拡大を理解するには、一九三〇年代の東インドにおける経済・商業活動を考慮に入れなければならない。当時、経済・商業の中心はバタヴィアではなく、東ジャワのスラバヤと東スマトラのメダンであった。ロマン・ピチサンが流行していた南カリマンタンはスラバヤ経済圏であった。商業出版としてのロマン・ピチサンは、おそらくミナンカバウの商業ネットワークにのって拡散していった、と考えられる。

『経験の世界』は一九三〇年代末におけるもっとも成功した文芸誌ではあったが、その他の雑誌も『経験の世界』と同様な形態をとり、一様に商業的に成功をおさめていた。出版社としては、たとえば、フォルト・デ・コックで『社会ロマン』を発行していたプニアラン・イルム(Penjiaran Ilmoe)、パダンのスリヤ(Surya)、[24] メダンでは『詩人のスケッチ』のチュルダス(Tjerdas)、『太陽』(*Matahari*)のノヴァ(The Nova Company)、『アルハンブラの神秘的宝石』(*Moestika Alhambra*)のアルハンブラなど[25]がある。ロマン・ピチサンの出版社は、ミナンカバウ、とくにパダン商人、貿易商が設立したものがおおかった。なかでもプニアラン・イルムは、パダンにおける民族系企業である民族銀行(Bank Nasional, 一九三〇年設立)、バティックのインコルバ社(Handel Maatschappij "INKORBA" N. V.)から資金援助をうけ、一九三〇年代後半急成長を遂げた出版社であった。そうした関係の一端を示す例として、『社会ロマン』創刊号に序文を寄せているパムンチャック(Dt. Pamoentjak)は、民族銀行社長秘書でもあった。[26] ここにもロマン・ピチサンの拡大とミナンカバウ人商業ネットワークの密接な関係をみることができる。

ロマン・ピチサン系出版社のもつ特徴は、第一に、明らかな民族主義的趣向である。たとえば、アディ・ヌゴロを筆頭に、ロマン・ピチサンは、「インドネシア人のための図書館」(Perpoestakaan Indonesia)の設立を呼びかけている。また、『社会ロマン』編集長タマール・ジャヤ(Tamar Djaja)とパムンチャックは、そろってインドネシア人の書籍の質を高める重要性を強調し、同誌はそれにおおきく寄与するはずである、とも説いている[*Roman Pergaoelan*, 1-1 (Juni 1939): 3-5]。ここでは、「近代インドネシア文学」を生産してきたといわれる、官製出版局であるバライ・

プスカタの存在ならびに実績をまったく無視している。第二に、事業の一環として、著名な、しかし流刑の身にあったインドネシア民族主義者の著作の出版がある。たとえば、プニアラン・イルム社は、スカルノの『イスラームに関するエンデからの手紙』(*Soerat-Soerat Islam dari Ende*)、ハッタ(Mohamad Hatta)の『世紀を超えた国際連盟の探究』(*Mentjari Volkenbond dari Abad ke Abad*)、ナッシール(Natsir)の『イスラームの文化』(*Cultuur Islam*)などを出版している。第三に、スマトラにおけるロマン・ピチサンの代表的作家はイスラーム的内容を有する作品をも出版している。その例としては、ハムカの『カーバの庇護のもと』(*Dibawah Lindungan Ka'bah*)や『ファン・デル・ワイク号の沈没』(*Tenggelamnja Kapal van der Wijck*)、ユスフ・ソユブの『黄金の鷲』(*Elang Emas*)[27]、マトゥ・モナの『祖国を求めて』(*Panggilan Tanah Air*)などがある[Freidus 1977: 46]。この点は、前述の東スマトラにおけるイスラーム関連誌の流行と軌を一にするだけではなく、ロマン・ピチサンの拡散とムハマディアとの密接なつながりを説明する。

このようにロマン・ピチサンは、きわめて民族主義的傾向の強く、ムハマディアとの関係がある多数の作者と複数の出版社によって、大量に生産されていた。安値大量生産ゆえに、しかもスマトラが主生産地であったにもかかわらず、消費範囲はそれに限定されなかった。バタヴィアから各地へと発信する民族主義的政治に関する情報の流れとは異なり、メダン、スラバヤという二大商業都市を経由して、消費地は広範囲に拡大していった。

四　文化地図の変動

ロマン・ピチサンは「インドネシア人図書館」設立を唱えただけではなく、「正しい」(benar)インドネシア語の創造の重要性をも強調している。その意味で、きわめて民族主義的であった。しかし、「正しい」インドネシア語を語

るには、何が正しく、何が正しくないのかという基準が必要となってくる。少なくとも、タマール・ジャヤやパムンチャックといった雑誌編集者の考えていた「正しい」インドネシア語は、華人新聞・文芸誌で用いられていたような華人マレー語でなかったことだけは確かである。[28] では、より具体的にはかれらが目指していた「正しい」インドネシア語とは何であったのだろうか。

すでに一九世紀後半からオランダ人は官製マレー語(dienst Malay)を創造し、公営初等学校教育あるいは東インド国家官僚機構のなかで使用させていた。二〇世紀初頭より東インド政庁は、バライ・プスタカをとおして官製の「正しい」マレー語普及につとめていた。マレー語で言葉を意味するバハサ(Bahasa)には、もともと正しい作法、礼儀正しさという意味がある。したがって、バライ・プスタカの言語政策には、原住民にオランダ人の考える正しい作法を教え込み、進歩の時代へと導こうとしていた、倫理政策が見事に反映されている。[29]

バライ・プスタカとは、そもそも二〇世紀初頭からの植民地政策である倫理政策の一環として、一九〇八年に設置された民衆読書室のための委員会(Commissie voor de Volkslectuur)を前身とする。[30] 六人の構成員は教育・宗教長官により任命され、委員長には原住民問題顧問官が着任した。その任務は原住民の識字層に適切な読み物を提供することにあった。一九一七年に、民衆読書室はリンケス(D. A. Rinkes)のもとに再編成され、バライ・プスタカというマレー名をつけられた。リンケスの主導のもと、編集、翻訳、新聞、印刷、書籍取引、書店、会計、民衆読書室(Volksbibliotheken or Taman Poestaka)という八部署が設置された。このうち本稿の議論との関連で重要なのは、編集部と民衆読書室の役割と実績である。

編集部では、編集部に送られてきた原稿のみならず西欧の文学作品までもふくめてすべての原稿の編集を担当した。編集部スタッフは原稿に対して改善点を指摘し、その後編集長であるオランダ人にその作品を出版するか否かの最終決断をあおぐ。編集部はバライ・プスタカが後に出版することになる三つの定期刊行物の編集にも携わった。バライ・

プスタカの主要機能は人びとに「役に立つ」読み物を提供することにあり、原住民の文芸や芸術の向上にはなかった。それゆえ、原住民にとってより読みやすく、「健全で」(sehat)[31]「役に立つ」読み物を生産するために、すべての原稿は検閲の対象であり内容変更を求められる対象であった。特徴的なのは、バライ・プスタカお抱え作家には、パダンで教育を受けたミナンカバウとタパヌリ出身者がおおかった点である。[32]それゆえ、一九二〇年代半ば以降バライ・プスタカから出版された「近代純文学」の大半は、パダンを舞台背景とし、そこでの強制結婚、近代化が主題となっていた。

しかし、バライ・プスタカは、当局の権威と植民地国家の安全保障を脅かすであろう出版物を警察力を動員して排除することはしなかった。むしろ、民衆読書室を設置することにより原住民に「役立つ」しかも「安全な」読み物を提供することに努め、書籍市場における寡占的な支配の達成に主眼をおいた。読書室は原則として東インド全土の中等学校に設置され、その数は一九一四年に六八〇、二五年には二一四一、そしてオランダ支配末期の三〇年代末には三千室を超えるまでになった。バライ・プスタカの書籍市場における寡占状況は、読書室から貸し出された図書の数にみてとることができる。二五年の段階で二百万冊近くであった読書室の利用図書数は、三〇年代末には三百万冊を上回っている。読書室の利用者数も同様に、二五年の二三万人強から三八年は四〇万人強へと増加している。こうした数字から明白なように、二〇年代後半には、出版、書籍市場におけるバライ・プスタカの覇権は確立されていた。それはたんに物質的覇権にとどまらず、言説の形成という点もふくんでおり、バライ・プスタカの文化的覇権にまでおよんでいた。

ところが、一九三〇年代にはいるとバライ・プスタカの活動にも陰りがみえはじめる。三一年には新聞モニターという主要な政治的役割は終焉をむかえ、大恐慌の影響もあり、バライ・プスタカの予算は大幅に削減された。実際、民衆読書室の数、貸出図書数、読書室利用者数いずれをとっても、一九三一年をピークに暫減しはじめている[Yamamoto 1995]。その結果、バライ・プスタカでの執筆、編集だけでは生活が困難になったインドネシア人は、それぞれ独自に

出版、文化活動に取り組むようになる。これが東インドにおける文化地図をおおきく塗りかえる契機となった。

メダンにおいて民族主義的作家、ジャーナリストの父と称され、メダンでの出版業発展の中心的役割を・担った人物として、アディ・ヌゴロがいる(33)。かれは、『プワルタ・デリ』と『二〇世紀』(*Abad XX*)(ともにシャリカット・タパヌリ発行)の編集長就任のためにメダンへ移住する以前、バタヴィアにおいてバライ・プスタカ発行誌『パンジ・プスタカ』の主任編集員であった。アディ・ヌゴロがバライ・プスタカを去ったあとその職を引き継いだのは、アリシャバナ(Takdir Alisjahbana, 一九三〇年から三六年)、アルメイン・パネ(Armijn Pane, 三六年から四一年)、そしてサヌシ・パネ(Sanoesi Pane, 四一年)といったタパヌリ出身者であった。また、ロマン・ピチサンの人気作家であったハムカ、スマン、スラシ、ダムフリはバライ・プスタカから作品を出版したこともある。なかでも、ハムカの作品『局長さま』(*Tuan Direktur*)、『神の正義』(*Keadilan Ilhai*)、『人生の谷間』(*Didalam Lembah Kehidupan*)は、まずロマン・ピチサンとしてロマン・ピチサン系出版社から出版され、その後バライ・プスタカからも出版されている[Soenoto 1980: 164]。

現実問題として、絶頂期であった一九二〇年代においてすら、バライ・プスタカの出版市場の寡占的支配と文化的覇権がおよんでいたのはジャワとマドゥラに限定されており、その他の外島では各地のエイジェントにその出版物の販売を依拠する必要があった。スマトラではロマン・ピチサンを発行していたシャリカット・タパヌリやプニアラン・イルムは、バライ・プスタカの主要なスマトラでのエイジェントでもあった。

言語に関しても、すでに一九二〇年代半ばから、官製マレー語の覇権的地位は衰退の気配をみせはじめていた。そもそもバライ・プスタカ文学作品の大半は、マレー語を母語としないミナンカバウ人やタパヌリ出身の作家によって書かれていた。また、アディ・ヌゴロが一九二〇年代後半にバライ・プスタカから出版したふたつの小説では、バライ・プスタカ作品にもかかわらず、口語体に近い、かれ自身のジャーナリスティックな文体が使用されている(34)。しかもアディ・ヌゴロは、前述のように、バライ・プスタカ誌『パンジ・プスタカ』の編集を任されていた。バライ・プ

スタカは「正しい」マレー語を生産していたという幻想がここに明白となる。

一方、「正しい」インドネシア語の確立を追求していた文化人たちは、みずからの自信を第一回言語会議（Congres Bahasa）という形で公けに表明した。会議は一九三八年六月二五日から四日間スラカルタにて開催され、中心を担ったのは純文芸誌『プジャンガ・バル』（*Poedjangga Baroe*）系作家、文化人であった。[35] そこにはロマン・ピチサン運動推進者も参加していた。アディ・ヌゴロは「新聞におけるインドネシア語」（"Bahasa Indonesia dalam Persoerat Chabaran"）、パムンチャックは「インドネシア語の綴り方」（"Edjaan Bahasa Indonesia"）と題する発表を行なった。会議決議として採択されたのは、公営学校において教育の言語として使用されてきた官製マレー語の使用中止要求であった。このようにロマン・ピチサンにかかわった民族主義者たちの出版物は、作家、編集者の側面だけではなく、言語の点からも官製のバライ・プスタカを内側から打ち崩すかのごとくに成長していった。

ロマン・ピチサン運動は、メダンを拠点とする四〇人ほどの作家、ジャーナリストが担っていた。一九三九年一二月にメダンにて開催された「ロマン（文学）に関する会議」（Roman Komperensi）は、かれらの民族主義的精神を顕在化したものであった。[36] この会議は、アディ・ヌゴロによって主催され、マトゥ・モナ、タマール・ジャヤ、ユスフ・ソユブ、ハムカ、シ・ウマ、ダムフリなど代表的ロマン・ピチサンの担い手が参集した。ロマン・ピチサンを論じる会議であった。会議の主目的は、流行しているロマン・ピチサンが社会にとっていかなる益があるかを明確にすることにあった。会議ではインドネシア文学（Roman Indonesia）の形成が議論されている。そこではインドネシア文学の文体・言語を読者の日常語に近づけてゆくことも議論された。かれらにはロマン・ピチサンにより、インドネシア文学がいっそう飛躍するとの確信があったのである。

こうした一連の言語と文学（ロマン）をめぐる議論の展開は、インドネシア民族主義者たちにとってインドネシア・ナショナリズム発現の重要な手段であった。そして、メダンこそその到達点を象徴するとする一文が、ロマン・ピチ

サンの担い手の一人であったハムカによって記されている。

ジャワからは契約苦力が、ミナンカバウ、タパヌリ、バウェアン、バンジャール、ブタウィ（ジャカルタ）などからは商人がやってきた。度重なる苦難を乗り越えたあと、人びと（bangsa）の新しい同化（混合）が起った。その結果、「デリの子ども」（Anak Deli）とでも呼ぶべき世代が誕生した。かれらは、形成過程にあるインドネシア国民（bangsa Indonesia）のなかでももっともおおきな花の開くつぼみである。[中略]

かれらの立ち居振る舞いは伝統やしきたりに囚われず、流暢なマレー語を話していただけではなく、それは地方訛のない「新しいインドネシア語」（Bahasa Indonesia Baru）となっていた[Hamka 1977: 7][37]。

進歩の象徴である新興都市メダンには、インドネシア・ナショナリズムの原動力が存在していた。メダンには東インド各地からさまざまな人々が到来し、定住していた。それにもかかわらず、かれらメダン住民は形成過程にあるインドネシア国民の模範となっていた。メダンの言葉は新しいマレー語となった。それはもはや、ジャワ、ミナンカバウ、バタヴィアなどの出身地方の訛のあるマレー語ではなかった。そもそもマレー語はあらゆる人の言語であり、さまざまな人がいろいろな地方でそれぞれのマレー語を使用していた。それは同時に誰の言語でもなかった[Dede 1991; Maier 1993]。誰の言語でもなかったからこそ、マレー語はロマン・ピチサンをとおして民族運動の言葉として、新しい民族の言葉であるインドネシア語へと変身を遂げることができた。新しいインドネシア語の獲得は、ロマン・ピチサンをとおしてインドネシア・ナショナリズムを闘っていた作者たちの目指していたものであった。メダンの日常言語としてのマレー語が新しいインドネシア語となった。ロマン・ピチサンは当事者によって、新しいインドネシア文学形成の根幹とも認識されていた。新しいインドネシア語によってロマン・ピチサンは書かれ、このインドネシア語をロマン・ピチサンは東インド各地へ運んでいった。このように、一九三〇年代末のロマン・ピチサンの洪水は、東インドの文化地図を塗り替えていたのである。

おわりに

一九三〇年代末の東インドでは、一種の文化的地殻変動が起こっていた。それには少なくともふたつの文化勢力が関係していた。ひとつはバライ・プスタカの推進した官製マレー語と近代文学の生産という文化事業であり、もうひとつはメダンを拠点としたインドネシア民族主義者のロマン・ピチサン運動であった。前者は、一九二〇年代には出版・書籍市場での文化的覇権を確立していたが、三〇年代になるとその事業に陰りがみえはじめた。替わりに、皮肉にも、バライ・プスタカが育ててきた原住民従業員は、バライ・プスタカを離れ、スマトラの新興商業都市メダンに集結し、みずからの出版、活字文化の世界を作りだした。その結果誕生したのがロマン・ピチサン運動であった。

ロマン・ピチサン運動を担っていたのは、アディ・ヌゴロを中心とする四〇人ほどの作家、ジャーナリストであった。ハムカ、ユスフ・ソユブ、マトゥ・モナ、タマール・ジャヤなどの中核メンバーは、イスラーム関連読物の作者としても名をはせていた。プスタカ・イスラームやプニアラン・イルムといった出版社は、ロマン・ピチサンだけではなく、多数のイスラーム関連書籍およびインドネシア民族主義者の作品をも出版していた。ロマン・ピチサンは、スマトラのみならずジャワ、カリマンタンセレベスなどで広く読まれていた。これらの地域はムハマディア運動の拠点でもあり、ムハマティアのネットワークがロマン・ピチサンの拡散におおきな役割をはたしていた。

ロマン・ピチサン運動は、バライ・プスタカの文化事業を内側から静かに打ち崩すかのように、みずからの民族主義的主張を展開した。それを象徴するのが、正しいインドネシア語の形成、インドネシア文学（ロマン）の確立、インドネシア人のための図書館設立といった明確な目標であった。こうして現実政治の世界ではいまだにオランダに包囲されていたインドネシア民族主義者は、ロマン・ピチサン運動をとおして文化における「主権」を獲得しつつあったのである。

(1) 管見のかぎり、「ロマン・ピチサン」の語を最初に用いたのはアディ・ヌゴロ(Adi Negoro)であった[*Pewarta Deli* (16 Dec. 1939)]。

(2) [Hamid 1939; Sou'yb 1939; *Pandji Islam* 1940：7801-7802]を参照。

(3) 一九七〇年代からインドネシア文学史における大衆小説の捉え直しがはじまっている[Jakob 1982; 押川 1986; Pramoedya 1982; Salmon 1981; Sykorsky 1980; Watson 1971]。また、インドネシアの「正統的」文学史の代表例としては、[Teeuw 1967, 1979]。

(4) インドネシア・ナショナリズムと新聞との関係については、[Adam 1995; T. Said 1988; Shiraishi 1990]を参照。とくに本稿の議論とかかわりの深い北スマトラの新聞発展史は、[M. Said 1976a, 1976b]に詳しい。

(5) 従来の研究で軽視されてきたもう一種類の出版物として学校教科書がある。バライ・プスタカは不思議なことに教科書生産には携わることがなかったために、学校教科書の出版は民間の出版社が担っていた。当初オランダ系出版社が市場の寡占める状態を保っていたが、一九二〇年代以降はタマン・シスワ、ムハマディアなどの民族主義教育組織、イスラーム団体が積極的に独自の教科書を作成するようになった。

(6) この新聞統制令と一九三〇年代東インドの治安維持、安全保障についての関係は[山本 1995]で論じてある。

(7) [Santoso 1984]より算出。この数字は一九八四年時点でのインドネシア国立図書館所蔵のものであり、既に紛失してしまっているものは含まれない。とりわけ、華語定期刊行物の所蔵はごくわずかでしかない。ここでの新聞と雑誌の区別は[Santoso 1984]に依拠している。ちなみに、[*Indische Verslag* 1931-41]によると、一九二五年以降四〇年までの東インドにおけるマレー語定期刊行物の数は[**表4**]のとおりである。

(8) ロマン・ピチサンに関する優れた研究として、マトゥ・モナの『インドネシアの紅はこべ』を分析した[押川 1986]がある。

(9) 数字の出所は一九三〇年統計である。それぞれ[*Volkstelling 1930*, IV, Table 2: 129-131; IV, Table 1: 113; IV, Table 5: 148]。

(10) もうひとつパダンの主要な出版社として一九〇二年設立のドゥ・フォルハルディング(De Volharding)があるが、これは華人系出版社であった[Adam 1995: 129]。二〇世紀初頭パダンでの出版業、新聞の歴史は[Navis 1955: 122-123; Adam 1995: 126-134]を参照。

［表4］ マレー語定期刊行物数の推移

		日刊			週刊			月刊その他		
		小計	ジャワ	外島	小計	ジャワ	外島	小計	ジャワ	外島
インドネシア人発行	1925	20	10	10	59	34	25	79	54	25
	1927	18	10	8	50	26	24	82	58	24
	1928	23	15	8	84	52	32	76	57	19
	1929	24	11	13	45	26	19	116	84	32
	1930	23	12	11	50	28	22	130	94	36
	1931	23	14	9	70	46	24	139	100	39
	1932	23	14	9	70	46	24	139	100	39
	1933	31	20	11	72	50	22	150	111	39
	1934	40	19	11	108	72	36	244	181	63
	1935	29	18	11	113	74	39	246	185	61
	1936	23	14	9	115	79	36	256	195	61
	1937	37	21	16	122	78	44	284	221	63
	1938	28	20	8	76	42	34	383	283	100
	1939	43	28	15	175	111	64	429	321	108
	1940	43	28	15	175	111	64	429	321	108
華人発行	1925	16	12	4	8	5	3	8	8	−
	1927	17	10	7	8	5	3	5	4	1
	1928	17	10	7	7	5	2	3	3	−
	1929	15	10	5	8	6	2	9	9	−
	1930	16	11	5	11	7	4	15	14	1
	1931	14	9	5	9	5	4	9	9	−
	1932	12	8	4	7	5	2	10	10	−
	1933	14	9	5	9	7	2	8	8	−
	1934	17	11	6	13	10	3	20	17	3
	1935	16	11	5	8	7	1	20	17	3
	1936	14	10	4	7	5	2	18	15	3
	1937	14	10	4	5	4	1	18	15	3
	1938	16	10	6	11	9	2	22	18	4
	1939	17	10	6	9	9	0	19	17	2
	1940	17	11	6	9	9	0	19	17	2

［出所 *Indische Verslag* 1931-41 より作成］

(11) メダンでも華人マレー語紙『スマトラ・ビン・ポ』(*Sumatra Bin Po*)、華語紙『ニュー・チャイナ』(*New China*) は、頻繁に当局から注意を受け、新聞統制令にかかることもあった [山本 1995]。

(12) 一九二〇年代、三〇年代のインドネシア・ナショナリズムについては [McVey 1965; Shiraishi 1990]。

(13) スマトラにおけるムくマディア運動については [Alfian 1989: 225-288, 299-339; Kahin 1984] を参照。

(14) 当時の定期刊行物にはかならずといってよいほど副題がついていた。本稿で大衆文芸誌を確定するさいも、副題にポピュレール (popoeler) の文字がはいっているものを目安とした。ちなみに、定期刊行物にポピュレールの副題がつくようになったのは一九二〇年代以降である。

(15) ロマン・ピチサンは、一九二〇年代半ば以降ジャワにおいて流行していた「月間読物」(tjerita boelanan) の伝統を引き継いでいた [押川 1986: 128; Watson 1971a: 141; Kimman 1981: 98]。このような月刊読物は、プラナカン華人によって生産され、出版され、消費されていた。おもな華人文芸誌とその出版社、出版地、出版頻度は以下のとおり。[Nio 1962; Salmon 1981] より作成。

1923 『百一の記録』(*Seratoes Satoe Tjatatan,* Pembatjaan Moerah; Buitenzorg)
1923-24 『ムラユの話』(*Tjerita Melajoe,* Excelsior; Weltevreden, everey two weeks)
1924 『新しい話』(*Tjerita Baroe,* Padang Drukkerij; Pare, 3 x month)
1924-25 『特別な話』(*Tjerita Pilihan,* Gio; Bandoeng, monthly)
1925-39 『生活』(*Penghidoepan,* Tan's: Soerbaja, monthly)
1928-29 『自由』(*Liberty,* s. n.; Djember, monthly)
1929-42 『満月』(*Boelan Poernama,* Boelan Poernama; Bandoeng, monthly)
1930-31 『美』(*The Beauty,* Kwee Khe Soei; Batavia, monthly)
1930-32 『パノラマの神秘的宝石』(*Moestika Panorama,* Hoa Sain In Kiok; Batavia, monthly; continued as *Moestika Roman*)
1930 『小説』(*Tjerita Novel,* s. n.; Bandoeng)
1930-39 『ロマン』(*Tjerita Roman,* Paragon Press; Malang)
1931-32 『物語の宝庫』(*Goedang Tjerita,* Minerva; Bandoeng, monthly)

1931–35　『キアム・ハップ』(*Kiam Hap*, Kiam Hiap: Tasikmalaja, monthly)
1932–42　『ロマンの神秘的宝石』(*Moestika Roman*, s. n.: Batavia, monthly)
1934　『物語の世界』(*Doenia Tjerita*, Doenia Tjerita: Bandoeng, monthly)

(16) なお、一九三〇年代におけるインドネシア人発行の大衆文芸誌はつぎのとおり。

メダン　『アルハンブラの神秘的宝石』、『運動の世界』、『詩人のスケッチ』、『経験の世界』、『極楽鳥』、『幻想の創造物』(*Gubahan Maya*)
パダン　『インドネシアのロマン』、『太陽』(*Surya*)
フォルト・デ・コック　『経験のロマン』、『知識の闘争』(*Perdjoeangan Ilmoe*)、『人生の闘争』(*Perdjoeangan Hidoep*)
ブンクレン　『生活の輪』(*Roda Penghidoepan*)
スラカルタ　『運動の世界』、『経験の世界』
ゴロンタロ　『精神の闘争』(*Perdjoeangan Batin*)、『世界の秤』(*Mizaan Doenia*)

(17) 以下の記述は、『経験の世界』各号に掲載されている裏表紙、広告、出版予告、在庫案内などをもとに構成した。

(18) パムンテャック、ダムフリともにミナンカバウ人。

(19) ユスフ・ソユブは『詩人のスケッチ』の、タマール・ジャヤは『社会ロマン』の編集長でもあった。また、三八年から四一年のあいだに、ユスフ・ソユブは五〇冊以上のロマン・ピチサンを、マトゥ・モナは一〇冊ほどの作品を出版した。

(20) 『経験の世界』には不定期に既刊シリーズのリストを掲載している。完売のものにはその旨表示がつく。ここから、販売状況を推測した。

(21) これらは［Sukarno 1959］に再録されている。

(22) この点は加藤剛氏のご指摘による。ムハマディアの拡大状況については［Alfian 1989: 304–307］。

(23) 一九三〇年代からジャーナリストとして活躍しているアニ・イドゥルス(Ani Idrus)女史によると、夫であるモハメド・サイード(Mohammad Said)氏と彼女は、『プマンダンガン』(*Pemandangan*)など当時のバタヴィアの民族主義的日刊紙数紙を定期購読していた。理由は、東インドのナショナルな民族運動の状況を把握するためであった。しかし、逆に、バタヴィアの民族主義者がたとえばメダンの主要紙『プワルタ・デリ』を購読することは稀であった、という(一九九三年九月二日のインタビュー)。

(24) 雑誌『太陽』の編集を担っていたのは、タハール・ラフマッド(Mohamad Thahar Rachmad)とスルヤブラタ(Suryabratha)。

(25) 『アルハンブラの宝石』の編集には、ラジョ・マゲック(M. S. Radjo Magek)、シ・ウマ(Si Oema)、ガイラルディア(Gaillardia)、ヌールレラハヤティ(Noerlelahayaty)などが携わっていた。

(26) ミナンカバウの政治的、社会的運動と民族銀行との関係については、[Kahin 1984]も参照。

(27) ちなみにそれぞれの値段は、二五セント、七〇セント、一ギルダー五〇セントである。

(28) 二〇世紀前半の東インドには、官製マレー語、民族運動のマレー語、華人マレー語の三種類が並存していた。紙面の制約もあり、この点について本稿では詳しい議論は行わない。とりあえず、[Dede 1991; Maier 1991]を参照。

(29) 官製マレー語の形成と定着過程については[Hoffman 1979; Maier 1993]を参照。またバハサのもともとの意味は、ヘンク・マイヤー(Henk Maier)氏(レイデン大学)のご教示による。

(30) 以下のバライ・プスタカに関する記述は、[Balai Pustaka 1948; Brodgeest 1930; Hidding 1938]に依拠している。なお、バライ・プスタカの新聞モニターの政治的役割の盛衰を分析した研究として[Yamamoto 1995]。

(31) 「健全さ」の社会通念化など、バライ・プスタカは植民地社会の言説形成に多大な影響力をもっていた[Setiadi 1992: 27-28]。その結果、「不健全」とされた書籍は、バライ・プスタカの非難の的となる。典型例がプラナカン華人による大衆小説であった[Maier 1991]。しかし、この類の大衆小説は、バライ・プスタカの民衆読書室から借り出される人気図書の上位を独占していた[Balai Pustaka 1948: 29-30]。また、バライ・プスタカによる文学作品に対する徹底した検閲については[Pramoedya 1957]。

(32) タパヌリはミナンカバウ地域ではなく、バタック人の土地のなかでも南部に位置するイスラーム教徒の地域である。

(33) アディ・ヌゴロの伝記も出版されている[Soebajio 1987]。

(34) 『若き血』(*Darah Moeda*, 1927)、『すばらしい恋愛』(*Asmara Djaja*, 1929)の二作品。アディ・ヌゴロの文体、言語の特徴については、デデ・ウトモ(Dede Oetomo)氏(アエルランガ大学)のご教示による。

(35) 『プジャンガ・バル』は、アリシャバナ、パネらによって創刊された文芸誌であり、その目標にはインドネシア民族の言語、文化の向上が掲げられていた。誌上で使われる言語はバライ・プスタカのそれと比較してより口語的であったが、『プジャンガ・バル』への寄稿者はそれこそが「美しい言語」なのだと絶賛していた[Freidus 1977: 40]。

(36) ここでは便宜的に、ロマン・インドネシアをインドネシア文学と訳しておく。興味深いのは「ロマン」という語が選択された点である。この会議については、[*Roman Pergaoelan*, 1-11 (20 Dec. 1939): 1-2; *Pandji Islam*, 6-52 (25 Dec. 1939): 7660]。

(37) この作品『デリへの遍歴の旅』は、もともと『プドマン・マシャラカット』誌に一九三九年から翌年にかけて連載された小説である。初版はチュルダス・メダン社(Cerdas Medan)から一九四一年に出版されている。引用文は第三版前書きに記されたものである。その文体から判断して、この一文はインドネシア独立後に書かれたものと思われる。この引用文で興味深いもうひとつの点は、当時メダンの人口の三分の一以上をしめていた華人への言及をハムカが巧妙に避けていることである。

参照定期刊行物、統計

Indische Verslag (Batavia: Landsdrukkerij, 1931-1941)

Volkstelling 1930, VI (Batavia: Departmen van Economische Zaken, 1935)

Doenia Pengalaman (Medan, 1938-1941)

Pandji Islam (Medan, 1937-41)

Pedoman Masyarakat (Medan, 1939-1940)

Pelita Andalas (Medan, 1925-1938)

Pewarta Deli (Medan, 1929-1941)

Roman Pergaoelan (Fort de Kock, 1930-1941)

Sinar Deli (Medan, 1930-1941)

引用文献

Abdoel Moeis (1928) *Salah Asuhan*. (Batavia: Balai Poestaka)

Adam, Ahmat B. (1995) *The Vernacular Press and the Emergence of Modern Indonesian Consciousness (1855-1913)*. (Ithaca: Cornell Southeast Asia Program)

Alfian (1989) *Muhammadiyah: The Political Behavior of a Muslim Modernist Organization Under Dutch Colonia-*

lism. (Jogjakarta: Gadjah Mada University Press)

Balai Pustaka (1948) *Balai Pustaka Sewajarnya 1908–1942.* (Jakarta: Balai Pustaka)

Brondgeest, B. Th. (1930) *Bureau voor de Volkslectuur: The Bureau of Popular Literature of Netherlands India: What it is, and what it does.* ([s. l.: s. n.])

Colombijn, Freek (1994) *Patches of Padang: The History of an Indonesian Town in the Twentieth Century and the Use of Urban Space.* (Leiden: Research School CNWS)

Dede Oetomo (1991) "The Chinese of Indonesia and the Development of the Indonesian Language," *Indonesia: The Special Issue on "The Role of the Indonesian Chinese in Shaping Modern Indonesian Life."* (Ithaca: Cornell Modern Indonesia Project)

Encyclopaedie (1921) *Encyclopaedie van Nederlandsch-Indie.* II. (The Hague: Nijhoff)

Foulcher, Keith (1980) *"Pujangga Baru": Literature and Nationalism in Indonesia, 1933–1942.* (Flinders University Asian Studies)

Freidus, Alberta Joy (1977) *Sumatran Contributions to the Development of Indonesian Literature, 1920–1942.* (Hawaii: Asian Studies at Hawaii)

Hamid, A. S. (1939) "Bandjir Roman," *Pedoman Masjarakat,* 5–49 (6 Dec. 1939)

Hamka (1977) [1941] *Merantau ke Deli.* (Jakarta: Bulan Bintang)

Hidding, K. A. H. (1938) "The Bureau for Popular Literature," *Bulletin of the Colonial Institute of Amsterdam,* 1–3.

Hoffman, John (1979) "A Foreign Investment: Indies Malay to 1901," *Indonesia,* No. 27.

Jakob Sumarjo (1982) *Novel Populer Indonesia.* (Yogyakarta: Nur Cabaya)

Kahin, Audrey R.(1984) "Repression and Regroupment: Religious and Nationalist Organizations in West Sumatra in the 1930s," *Indonesia,* No. 38.

Kimman, Eduard J. J. M. (1981) *Indonesian Publishing: Economic Organizations in a Langganan Society.* (Hollandia Baarn)

Langenberg, Michael van (1977) "North Sumatra under Dutch Colonial Rule: Aspects of Structural Change," *Review of Indonesian and Malaysian Affairs,* 11-1.

Maier, Hendrik. M. J. (1991) "Forms of Censorship in the Dutch Indies: The Marginalization of Chinese-Malay Literature," *Indonesia: The Special Issue on "The Role of the Indonesian Chinese in Shaping Modern Indonesian Life."* (Ithaca: Cornell Modern Indonesia Project)

_____(1993) "From Heteroglossia to Polyglossia: The Creation of Malay and Dutch in the Indies," *Indonesia,* No. 56.

McVey, Ruth T. (1965) *The Rise of Indonesian Communism.* (Ithaca and London: Cornell University Press)

Navis, A. A. (1955) "Tjerita Rakjat Minangkabau," *Budaya,* No. 4.

Nio Joe Lan (1962) *Sastera Indonesia-Tionghoa.* (Djakarta: Gunung Agung)

O'Malley, William J. (1977) "Indonesia in the Great Depression: A Study of East Sumatra and Jogjakarta in the 1930's," (Ph. D. Dissertation, Cornell University)

押川典昭 (1986)「『マハデキストの紅はりぐ』とタン・マラカ――大衆小説と革命家伝説――」『上智アジア学』第四号

Pramoedya Ananta Toer (1957) "Balai Pustaka harum namanja didunia internasional dahulu," *Star Weekly,* No. 580 (9 Feb. 1957)

_____(1982) *Tempo Doeloe: Antologi Sastra Pra-Indonesia.* (Jakarta: Hasta Mitra)

Said, H. Mohammad (1976a) *Sejarah Pers di Sumatera Uatara dengan Masyarakat yang dicerminkannya (1885 - Maret - 1942).* (Medan: Percetakan Waspada)

_____(1976b) *Pertumbuhan dan Perkembangan Pers di Sumatra Utara.* (Medan: Waspada)

Said, Tribuana (1988) *Sejarah Pers Nasional dan Pembangunan Pers Pancasila.* (Jakarta: CV Haji Masagung)

Salmon, Claudine (1981) *Literature in Malay by the Chinese of Indonesia: A Provisional Annotated Bibliography.* (Paris: Editions de la Maison des Sciences de l'Homme)

Santoso, Wartini (ed.) (1984) *Katalog Surat Kabar: Koleksi Perpustakaan Nasional 1810-1984.* (revised ed.) (Jakarta: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan)

Semaoen (1920) *Hikajat Kadiroen.* (Semarang: Kantoor P. K. I.)

Setiadi, Hilmar Farid (1992) "Kolonialisme, Bacaan dan Rakyat Hindia: Balai Poestaka di Hindia Belanda," (Makalah untuk diskusi ke-3 "Basis Material Kebudayaan" kerja sama Yayasan SPES dan PPs-UKSW, Salatiga, 5 Mei 1992)

Shiraishi, Takashi (1990) *An Age in Motion: Popular Radialism in Java, 1912-1926.* (Ithaca and London: Cornell University Press)

Soebagijo, I. N. (1987) *Adinegoro: Pelopor Jurnalistik Indonesia.* (Jakarta: CV Haji Masagung)

Soenoto, Faizah (1980) "Tinjauan Bahasa Roman Indonesia Sebelum Perang," *Archipel,* No. 20.

Sou'yb, Joesoef (1939) "Bandjir Roman," *Pedoman Masjarakat,* 5-50 (13 Dec. 1939)

Sukarno (1959) Dibawah Bendera Revolusi. Vol. 1. (Jakarta)

Sykorsky, W. V. (1980) "Some Additional Remarks on the Antecedents of Modern Indonesian Literature," *Bijdragen tot de Taal-, Land-en Volkenkunde,* 136-4.

Teeuw, A. (1967) *Modern Indonesia Literature.* (The Hague: Nijhoff)

_____(1979) *Modern Indonesia Literature.* II. (The Hague: Nijhoff)

山本信人 (1995)「『秩序と安寧』のために――新聞統制令からみた一九三〇年代の蘭領東インド――」『法学研究』第六八巻第一〇号

Yamamoto Nobuto (1995) "Colonial Surveillance and 'Public Opinion': The Rise and Decline of Balai Poestaka's Press Monitoring," *Keio Journal of Politics,* No. 8.

Watson, C. W. (1971a) "The Sociology of the Indonesian Novel, 1920-1955," (M. A. thesis, University of Hull)

_____(1971b) "Some Preliminary Remarks on the Antecedents of Modern Indonesian Literature," *Bijdragen tot de Taal-, Land-en Volkenkunde,* 127-4.

[謝辞] 本稿作成にあたって、加藤剛氏（京都大学東南アジア研究センター）には草稿全体を通読していただき、貴重なコメントを賜わった。本稿の一部は、一九九四年六月一五日慶應法学会全国大会において、「ふたつの文書世界」と題して発表する機

会を与えられている。なお、本稿の調査は、一九九三年七月から一二月、九四年七月から八月、九五年七月から九月の三回にわたって実施した。初回の調査には大平正芳記念財団第六回環太平洋学術助成（一九九二年）を受けた。第三回目の調査にあたっては、インドネシア社会科学院（Lembaga Ilmu Pengetahuan Indonesia）からは格別の支援を賜わった。それぞれ記して感謝の意を表したい。

（一九九五年八月一四日脱稿、九月一一日改稿）